

Truiamph onedollar ～勝利へ
の放浪者～

リユーヤ

体全体を弓なりに持ち上げたかと思ったら、今度は風船のように腹が大きく膨れ上がるのだった。同じように口の中も空気を詰め込んだかのように膨れ、ジンの目玉が完全に白くなる。ドクターを始め、アゲートを除く一行がこの瞬間に何が起こるのか固唾をのんで見守るのだった。アゲートはこの瞬間またジンの口から吐しゃ物が噴き出すのかと思い一歩離れて身構える。

次の瞬間、ジンはアゲートの読み通り吐き出した……もちろん吐しゃ物ではない。

一体それは何か？

簡潔に述べるならそれはまるで……

まるで、そう・・・猛烈に発達した低気圧そのものだった。

*ビュゴオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！*

ジンの口の中から謎の暴風が発生した。低気圧の塊は一瞬にして周囲の物体を飲みこみ、ジンを中心に上昇気流を発生させ巨大な竜巻を生み出した。風は敵味方、有象無象の区別無く何もかもを巻き上げてしまった。

その場所が砂漠だったのが最も最悪なケースであり、砂を巻き込んだ竜巻は一瞬にして砂嵐に姿を変え黒い風となり被害を拡大させたのだった。

グスタフも例外ではない、遠くの岩場から突如突風が吹き荒れたかと思った矢先、今度は砂嵐が目の前に現れ自然災害の前にあっという間に巻き込まれ、コルト共々砂と暴風の渦に飲み込まれてしまった。頭で何が起こったのかを理解するよりも早く、どこるか悲鳴を上げることも許さない砂嵐は長時間続き、自然消滅したのはそれから30分以上先になってしまうのだった。

砂嵐の影響で周囲の地形が何もかもが完全に変わってしまった。砂丘の位置や高さ、形、砂から露出した岩場の面積、風向きから雲の流れる方向に至るまで・・・唯一変化がないのは太陽の位置ぐらいだった。

乾いた砂の中から人間の腕が生えだし、砂をかき分けて中から誰かが地上に生還した。グスタフだ、彼もいきなりの事で頭が混乱し、何の抵抗もできぬまま砂嵐に飲み込まれて気を失い、気が付いたら砂の中に埋もれていた。

かなりの量の砂を飲んでしまったようで、グスタフは砂の中から這うように脱出すると何度も激しく咳こみ、口の中から砂を吐き出した。水分を失った口の中はカラカラに乾き、砂特有のジャリとした触感だけが残っている。ダイヤモンドの魔力をもってしても失われた水分まではどうにもならない様で、グスタフは喉の渴きを訴え水を欲するのだった。

周囲を改めて見回すと、辺りにはまだ風が吹き荒れ砂煙が充満して視界が悪い状態になっていた。なぜ突然目の前で砂嵐が発生したのかわからないがあの規模では連中もただでは済むまいと思うが、妙な胸騒ぎがする。

特にあのメガネの小僧・・・ジンの存在が気になる。7人全員の首を胴体から切り離さない限りこの不安感は拭いきることはできないだろうと思い、口の周りにへばり付く唾液混じりの砂を拭い、改めて散策を始めた。

しかしその散策はグスタフ自身が立ち上がったただですぐに終わった。わずかな気配を頼りに後ろを振り向いた直後、一瞬我が目を疑いたくなってしまうような光景が飛び込んできたのだった。

そこには砂漠の砂を両の脚で踏みしめ、凄まじい殺気を漲らせながら睨んでいる男がいた。それだけではない、男の背後にはグスタフが仕留め損ねた連中全員が横たわっていた。奇麗に整列させたかのように、几帳面なくらい正確に揃えられた彼らは自分たちの前に立っている男をツチノコでも見つけたかのような眼差しで見上げている。

全員開いた口がふさがらないのも無理はない、その男はついさっきまで満身創痕で息をすることだってままならないほどに傷ついていたはずの男だったからだ。

またも強風が吹き、目の前の砂煙があっという間に晴れて視界が良好になった。強い日光が照らした男の姿は、以前まで知っているはずだった人物とは全く違う姿を成していた。

失われていたはずの左腕と右足が再生している。正確に言えば、失われている肉体の部位に鈍い輝きを放つ鋼の鎧を纏っていた。銀色の手足の他に、右腕には黒鋼のガントレット、左足には右腕と同じ膝までの足具、両肩を包む左右非対称のショルダーアーマー。そして最も目を引くのがその背中、袖を切り詰めた漆黒のコートの背中・・・右の肩甲骨から生えた大きな翼。天使を想像させるような美しいディテールの翼だが、残念なことにこの翼は右肩からしか生えていない片翼の翼で、しかも羽の繊維一本一本が金属のような光沢を放つ漆黒の翼だった。あえて例えるなら、それは天使ではなく墮天使か悪魔なのであろう。

そしてその肝心な中途半端な翼を所有する人物は誰かと言えば・・・もう言うに及ばずとも分かるだろう。

ジン・K・ジェイド、その人だった。

ジンは周囲の困惑を物ともせず落ち着いた・・・しかし激しい感情を露出している表情をしながら視線を下に向けた。鎧をまとった左手には、どこで拾ったのか自分の掛けていたメガネを持っている。グスタフに壊されてボロボロになっていたはずなのだが、それはあたかも新品のような装いをしており、何事も無かったかのようにジンはそれを顔に再び装着するのだった。

「フゥ・・・これでよく見える」

「なんなんだ・・・いったいなんなんだ貴様は！？」

もう頭の理解が追い付かなくなっている。何で突然砂嵐が発生したのか？なぜジンが立っているのか？なぜジンが生きているのか？なぜ失われた手足が再生しているのか？なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・

頭をグシャグシャに掻き毟りたくなってしまう、なぜこの男は何度も自分の野望の前に立ちふさがろうとするのか。

「なんなんだ貴様は！？そんな格好になって、何のつもりだ！？」

「・・・オレにもよく分からねえ。だけどよう、この力の使い方は分かる・・・オレの力だからな」

ジンはそういうと拳を握りバキバキと骨を鳴らして準備運動に取り掛かった。肩も回して簡単なストレッチを終えると、ジンは懷から小さな小箱を取り出す。一瞬何をするのか恐れて身構えたが何て事はない、手に握っていたのはタバコの箱だった。ジンが愛用しているタバコ『ラピスラズリ』の最後の一本を咥え、空になった箱を握りつぶした。

喧嘩の準備は万端、あとは火蓋を切るのみ。

「これならテメエを殺すことができる。テメエを完全に殺しきってやるから覚悟しておけよゲテモノ」

「ほざくなガキがああ！！！」

怒りで理性を失ったグスタフは肺に膨大な量の空気を吸い込ませると、体内に残っているジェットの魔術と共に全てを吐き出した。猫眼を焼いた火炎放射よりも大きい、一本の巨大な火柱がジンへ襲い掛かった。

ジンの背後に横たわっている5人は急いでその場から逃げ出そうとするが、ここ一番で傷が痛みまともな身動きすら取れなくなっている。

このままでは確実に全員灰になってしまう、そう覚悟してしまう場面なのだろうがジンはいたって冷静だった。迫りくる炎をぼんやりと見つめながら口に咥えたタバコを指でいじっている。

「．．．．ま、なんとかならあな」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

凄まじい炎がジン達を完全に捉え、辺り一面を飲み込んだ。炭どころか灰の一片すら残さない地獄の業火と呼ぶに相応しい炎は大地を焼き尽くし、岩を溶かし、砂漠の砂をマグマに変えた。次第にグスタフの体内から炎の魔力が底を突き、炎が吐き出せなくなるまで吐き出し切ると周囲の環境は全く別の者へ姿を変えていた。

炎で直接燃やされた大地は割れて小さな谷を形成し、黒く炭化した岩や砂は燃えてドロドロに溶けマグマ化している。この地形の著しい変化には世界地図の書き換えも必要になるだろう。全ての魔力を吐き出したグスタフは疲労困憊し、息苦しそうに喉を押さえながら呼吸を荒立てている。さっきから力を使いすぎてしまっているせいか、体全体が軋み疲れが出てきている。しかしそれももうこれで終わりだ、あの面倒だった連中はこの一撃で確実に焼却処分に成功した。あの炎の中で生きているハズなどたとえ天地が引っくり返ろうが・・・・・・・・

・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・・・・・・

「・・・・・・・・な・・・・・・・・んだ・・・・・・・・と！？」

グスタフは自分の目玉が腐っていると思いたくなかった。両目を剥いて今日の前にいる輩を確認すると、今度はグスタフ自身が絶望したくなってきた。目の前に、焼かれ死んだはずの連中がまだ生きている。まるで何事も無かったかのように、ジン達の周囲のみが炎の被害を受ける事無く岩と砂の大地を残してその場に留まっていたのだった。驚愕したのはグスタフだけではない、確実に死んだとばかり思っていた他の5人も今日の前で起こったことを信じられず目を丸くしているくらいなのだから。あの一瞬、自分たちが炎の渦に飲み込まれる直前にジンが何かをし、一行を炎の被害から守ったようなのだ。そして傷一つ、焼け焦げひとつ負っていないジンはグスタフの炎を利用して火のついたタバコを咥え、悠々と煙を吐き出した。

「・・・・・・・・サンキュー、タバコの火にはちょうど良かったぜ」

まるで人をコケにしたような腹の立つ、余裕すら窺えるその表情にグスタフは完全にキレてしまった。両目を剥いて空へ雄たけびを上げると、熊のように大地を力強く蹴り走り出す。最後の演奏の開幕を悟ったジンもニヤリとほくそ笑むと、その場で翼を数回羽ばたかせながら飛び上がり、焼き果てた大地を飛び越えてグスタフの元へ文字通り「飛んで」行った。ジンは自らの翼と覚醒した「魔力」を用いて、ジェットと同じ飛行能力を手に入れたのだった。

グスタフの正面から斜め45度上空、ジンは彗星のようなスピードで鋼の足に向けて急速降下を始めた。迎え撃つようにグスタフは拳を握り迫りくるジンの脚底めがけてダイナマイトのような破壊力を持つパンチを勢いよくぶつけた。足と拳が衝突した瞬間、周囲に2台の車が正面衝突するような激しい衝突音を響かせると、二人はお互いの攻撃に圧倒されはじけ飛んでしまった。

一瞬早く体勢を立て直したジンは空中で一回転すると、ブーメランのように旋回し再びグスタフへ躍り出る。砂の中から立ち上がったグスタフの左ほほを、拳骨で殴り抜けたのだ。この攻撃、今までのジンを知っている連中から見れば予想外の攻撃であり当然グスタフも反応が遅れ拳がクリーンヒット、再び砂の中に顔からダイビングしてしまった。

攻撃はそれだけにとどまらない、左方向に飛んでいったグスタフを追いかけるように左腕をブレーキとして砂の中に突っ込み、地面をえぐりながら進行方向を無理やり変えると、今度は倒れているグスタフの頭をボールのように蹴り飛ばした。普通の人間ならばこんなことをすれば間違いなく死ぬような極めて悪質な一撃を食らったグスタフは空中に舞い上がり、今度は空中に浮いたボールを蹴り返すように横からの回し蹴りを顔面へ浴びせたのだった。

空中を自由自在に移動できる今のジンの次の行動を予測できないグスタフは訳も分からぬまま岩山へ衝突し、その衝撃で全身を粉々に破壊されてしまった。ジンの方はと言うば、一度砂の大地に舞い降りると軽やかにステップを踏み、挑発するように遠くで気を失いかけているグスタフへ手招きをしている。

今にも死にそうだったころの面影も無く、目の前で起きている「ジンが優勢している」戦いをただ眺めることしかできない他の一行は、開いた口が塞がらず瞬きも忘れてひたすらにポカンとした表情を浮かべているのだった。

「何が．．．．ジンに何が起こったのさ？」

「魔力が、ジンの魔力が覚醒したんだよ．．．な、ドクター？」

「それで間違いはないはずだ．．．．しかしこれは一体」

ドクターはあの時、確かにジンの体内から「魔術」に匹敵するだけの魔力を引っ張り出すことに成功した。体内から噴出した魔力は台風のように吹き出し周辺に甚大な被害を及ぼしながらジンの体に馴染み、やがて定着したのを目の前で確認できた。

まではいいが、あの恰好はどういうことなのだろうか？存在しない物質を作り出したのかどうか知らないが、ジンは失われた肉体の部位を完全に再生しているだけに留まらず、兵装までしている。あの翼やらアーマーやらガントレットやらはどこから出てきたのか？

予想できる可能性としては「魔力の固化化」、簡単に言えばジェットのプロメテウスやドクターのジャック・ザ・リッパーと同じ原理で、体外に放出した魔力を粘土細工のように成形し体表に定着、装備しているという可能性。

しかしこれが実の所言うは易し行うは難し、「物質」では無い魔力を「固化化」するには強い集中力を要しそれを維持するのにも高い技術が必要とされている。ドクターもこれを完全に習得するのに一ヶ月かけたというのに、ジンはそれを魔力覚醒からたった30分で習得してしまっている。

才能や潜在能力、果ては天才などで片づけていい能力では無い．．．一瞬にして自らの魔力を理解・掌握し、魔力を固化化させて装備を手に入れ、肉体の傷の回復し完璧な飛行魔術まで体得しているジンが明らかに「異常」としか言えないのだった。

「難しい話はよく分からないがドクター、貴様はアイツからどんな魔力を引き出したんだ？」

脇腹の傷口を自前の腰布でキツく縛り上げながら、虎眼がそんな素朴な質問を投げかけた。魔法の力が魔術まで昇華している以上ジンの魔力にも当然属性がある。ジェットの炎、ドクターの氷、そしてここにはないがコルトの雷のように。

では、ジンが体内に秘めていた魔力の属性とはなんなのだろうか？答えは本人にしか分からないだろうが、それでも予想を立てることは容易なことである。ヒントになるのはジンの魔力が覚醒した瞬間に発生したあの台風のような猛烈な風．．．それ即ち

「仮説でしかないが、メガネ君の魔力の属性は『風』と見て問題ないだろう」

「やっぱそうか、それしか考えられねえもんな今ん所」

「へえ風の魔術さあ・・・何かジンのイメージにピッタリさ！」

そんなのんきにしている一行は放っておいて、ジンの戦いにもう一度目を向けよう。

余裕を見せているジンに対し、グスタフは明らかな疲労が目立ち始めていた。肉体の傷の再生速度が落ち、今まで感じなかった疲労感や痛みが体内に残留している。神に等しい力を得てはしゃいでいたころの様子は見る影も無く、気が付けば体全体が元の姿にしぼんできているような気さえた。

力が弱くなっている、体内に宿したダイヤモンドの力が弱くなっていることを身をもって感じ、グスタフは身の危険を感じている。

（クッ・・・ここにきて限界だということか？何とか、何とかせねば！）

「どうしたんだよゲテモノ、元気がないみてえだな？そんならこっちが続けさせてもらうぞ、良いよな？」

ジンは片眉を吊り上げながらそういうと、左腕をまっすぐ正面へに伸ばし親指と中指を重ね合わせ徐々に力を込め始めた。指全体が小さく震え、二つの指をこすり合わせるのだった。

「ま、テメエの答えなんか必要ねえけどな」

パチンッ！

指パッチン、グスタフの意見などハナから無視してジンは力強く指を鳴らした。するとどうだろうか、指を弾く音が空気を振動させ波となり、音速でグスタフの元へ届いた。

その直後、岩肌にめり込んでいたグスタフの全身が一瞬激しく揺さぶられた。見えない力で真正面から押し付けられるようにグスタフの体は岩の中にめり込んだ。

何が起こったのか理解されるより早く、ジンはもう一度指を鳴らした。小気味の良い音の波動が再び耳に届いたかと思えばまた体に衝撃が走る。気のせいではない、ジンは指を鳴らすたびに何かをして、グスタフに攻撃をしていた。

ジンの指パッチンは止まらない、グスタフが身動きの取れない今のうちに絶え間なく指を鳴らし続けると、強烈な波動が次々と襲いかかりグスタフの全身をどんどん岩の中に挟り込ませてゆくのがあった。

小さい波動の攻撃が、徐々に大きな壁で押しつぶされるような感覚に近づいてきたグスタフはついに悲鳴を上げ始めたのだった。

「グガアアァァ！！や・・・やめろおおおお！！」

「ゼッターやめない。今のオレ、そういう顔してるだろ？ああ！？」

最後に握力を最大に使って発生させた波動は、岩にめり込んでいるグスタフの体を岩の向こう側

へ貫通させ、さらに後方にいくつもある別の岩山を破壊しながらミサイルのように吹き飛ばされてしまった。

グスタフの姿が見えなくなった途端ジンは胸の中にたまっていた鬱憤が晴れたようにスッキリとした表情となり、啞えたタバコをつまんで口の中から煙を吐き出したのだった。

音の波動はグスタフのみならず、はるか後方に居るはずだったドクター達にも及んでいた。ただしグスタフのような破壊的衝撃ではなく、指を弾いた音のみが全身に響き渡り、頭の中から揺さぶられる様な激しい振動波だった。この衝撃波の正体がジンの放つ魔力から生まれた魔術であることに間違いはないが、その正体に気が付いたドクターは軽く舌打ちをした。何せ自分の仮説が半分間違っていたのだから。

「耳が痛いさあ～～～！！」

「あ～た～ま～が～い～た～い～ヨ～！」

「何だったんだあのやかましい音は！？」

「パッチンパッチン鳴らすたびに・・・頭が割れる！おいドクター、これってまさか！？」

「ああ間違いない・・・小生としたことが、とんだ思い違いをしていたようだ」

ドクターは最初、ジンの魔力の正体を『風』を見ていた。しかしこの現象からその予想は半分しか正解していなかったことを思い知らされる。

ドクターは最初、ジンの魔力の正体を『風』を見ていた。しかしこの現象からその予想は半分しか正解していなかったことを思い知らされる。

風の魔術には間違いない・・・だがただの風系魔術ではない。魔術には一つの属性に対しいくつかの分岐が存在している。『火』の魔術なら爆発系の「エクスプロージョン（炸裂）」、燃焼系の「バーニング（焼却）」。『水』の魔術なら液体を支配する「ウォーター（流体）」、氷結を司る「フリージング（氷結）」といった具合にだ。

ジンの魔術もその分岐の中の一つに該当する。『風』魔術の分岐は二つ、気流・空気を操作する「サイクロン（旋風）」、そしてジンが覚醒したのがそのもう一つ・・・音と衝撃を司る「サウンド（音響）」。

ジンの魔術の正体は、「音」の魔術だったのだ。

「音？そんな魔術なんぞあるのか？」

「間違いない、メガネ君のあの指パッチンから発生したこの音とこの衝撃がすべての証拠だ」

「まったあの馬鹿は・・・特殊な魔術を開眼したもんだ」

風と言う特殊な魔術においてさらに特殊な能力を持つ音の魔術を身につけたジンはご機嫌だった。力の使い方は理解した、魔術の発動方法も分かった、魔術がもたらす攻撃力・効果・性能もよく分かった。

分かったうえで改めて確信が持てる・・・この力を使えば、今度こそ確実にあのゲテモノを殺すことができる・・・と。

ジンはニヤリと凶悪犯罪者特有の危険な笑みを浮かべると、フィルターまで吸いきった吸殻をその場に捨てて地面を強く蹴った。音のみならず、風の魔術まで使いこなすジンはまさに疾風のごときスピードで空中を滑空し、グスタフの貫通したいくつもの穴を潜り抜けて、今再びグスタフの目の前までやってきた。ついさっきまで立っていた場所からグスタフのいつ位置までの距離はざっと500～600m前後、その間の移動時間はたったの5～6秒。音速とまではいかなかったが、このスピードはジェットのコックピットでの飛行より格段に速い。

当のグスタフはと言えば、岩に上半身が完全に埋もれてしまい身動きが取れない状況にあった。必死にもがくが肉体の損傷が思ったより激しく、身をよじる度に体のどこかの筋肉繊維が軋み、千切れる音が聞こえるのだった。

そんなみじめな姿に成り下がっているグスタフを見下しながら、ジンはもう一度微笑んだ。歯肉を剥き出しにし、目を細め、頬肉を釣り上げた最高に不快感を抱かせる最悪の笑いだった。

「いい格好だなゲテモノ・・・その姿がテメエの言う神様ってか？滑稽だな」

「グゥ・・・言わせておけば貴様ああ、殺してやるぞおお！！！」

闘争心を剥き出しにするのは結構だが、今そんな恰好で吠えたところでちっとも怖くなどない。負け犬の遠吠えとはこのことだろう。

ジンはもがき暴れるグスタフを無視しながら右手を突き出し、グスタフの顔面をガッシリと掴んだ。虎眼のような握力があればそのままこの頭を卵のように握りつぶすことも可能なのだろうが、生憎ジンにそんな握力はない。なのでほどほどの握力でそのままグスタフの顔面をメキメキと締め付けるのだった。

「グガァ・・・何をする小僧！？この手を離せ！！」

「・・・魂のビートに聴き惚れて、気い狂うんじゃねえぞ？」

何か不安な気持ちを揺さぶるような危険な発言をした直後、ジンの右手がぼんやりと緑色に輝きこのゼロ距離から魔術を発動させた。今度は一体何が起こるのかわからず、思わず息を飲んだとたん・・・・・・グスタフの頭の中から音が響き出した。

耳鳴りを発生したときのようなあのキィィンと響くような音が、体内で響き渡ってゆく。音は次第に音量を増しながら全身を小刻みに震わせ、数秒もすると体の四肢がガクガクと震えだし、眼球が激しく揺れて視界が定まらなくなり、ついには頭の中が凄まじい振動を起し体が言うことを利かなくなったのだった。

凄まじい振動波は周囲にも被害を及ぼし、足元の砂は振動に合わせて水面の波紋のような同心円状の波を形成し、周囲の岩山は小刻みに震えながらガラガラを崩れ出し、果ては500m以上離れている一行にも振動波が襲いかかり、全員が一緒になって耳を塞ぎ始めた。凄まじい振動は肉体の傷を広げ、激痛と共に血が零れ出すのだった。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！耳も頭も体の傷もみんな痛いさああああ！！」

「ニョワアアアアア！！何ヨこの音ハあああ！？」

「キシシ・・・・メガネ君の音の魔術が生み出した高周波だ！気を付けたまえ、気を抜くと頭が割れて吹っ飛ぶぞ！」

「もう割れてるわああああああ！！あの馬鹿野郎、もっとアタシ達にも気を使いやがれえええええ！！」

小刻みなれど激しい空気の振動は物体を簡単に破壊する力を持っている。そんな破壊の音をゼロ距離で喰らっているグスタフは一溜まりもなかった。高周波振動波はグスタフの悲鳴すら掻き消し、ジンの手の中で悶え苦しんでいる。いつしか全身の穴と言う穴から血液が吹き出し、噴き出した血そのものが空気の振動で霧状に変化し空気中へ飛散した。

ジンの音は約一分間続けられ、ようやく振動が止まった頃にはグスタフの体は血液を吹き出し尽くして半ミイラ化して正真正銘のボロ雑巾と化してしまっていた。最初にボロ雑巾にされた恨みもこれで晴らされ、ジンは気分爽快だった。

しかしこれでもまだ死ぬことはなかった。肉体をゆっくり回復させつつ、グスタフは自らの拳を新たな武器に作り替えることに成功した。

指の隙間からギョロリと睨むと、手の甲から出てきた回転丸鋸でジンの首めがけてまっすぐに伸ばした。意表は突かれたものの薄皮一枚を犠牲にしながらこれを避けると、ジンは背中中の片翼を羽ばたかせ空中で一回転しながら地面に着地、一度グスタフから距離を置いて現在の様子を窺った。

グスタフの体は今のジンの振動波のおかげで岩の中から脱出するのに成功し、自由の身となっている。両手の甲には掌よりの少し大きいくらいのサイズの丸鋸が回転し、火花を散らしている。どうせならあの時ジンの腕を切り落とした時と同じ大型鋸が理想的なのだろうが、生憎今のグスタフの体内に残されている鉄の量はほとんど残されていない。あの時の水蒸気爆発の影響で体組織と共に体内に蓄えた大量の鉄分も損失してしまっていた。岩盤の中にわずかに含まれていた鉄

の分子をかき集めながら体内に吸収し、この程度の丸鋸を精製するのが今の限界だった。

しかし今はもうそれで構わない、もうそんなことなどどうでもいい。グスタフの頭にか完全に血が昇りきり冷静な判断なんぞ出せないほどの精神状態となっていた。激しく息を荒立て充血した目でジンを睨みつけると、鋸の回転速度を上げて威嚇を始めるのだった。

「・・・やれやれ面倒くさいねえ。そっちがその気ならこっちだって・・・こうするし」

ジンはそれでもなお不敵な笑みを維持すると、両手を下し自らの両腰へゆっくりとあてがった。普段ならここに愛刀が各一本ずつぶら下がっているのだが、生憎今日はそれが無いときた。だが今のジンにとってそんなこと些細な問題にすらならなかった。なぜならば・・・

「物が無けりゃよ～・・・作りゃいいじゃねえか」

掌から魔力が放出され、淡く輝く魔力が細長い棒状のものに形状を変える。棒状の物体は緩やかな曲線を描きながらその質量と光量を増していくのだった。

一瞬目くらましのような強い光を放つと魔力は輝きを失せ、光の中から新たな物体を作り上げた。右の腰に現れたのは赤黒い鞘に六角鏢に黒の練り巻き柄の刀。左腰には黒塗り鞘に鋭利な菱形鏢に同色の柄を持つ刀。今まで愛用してきた剣ではなく、あの時使ってお気に召したらしい刀がジンの両腰に出現した。

スラリと刀身を抜けば、左に握る赤黒い刀は刃渡り80cm前後の刀身に三本杉波紋、右に握るはほぼ違わぬ刃渡りの刀身に一点の歪みも見られない完璧な直刃。日本の肩はな人の手の中で太陽の光をギラギラと反射させながら輝き、右手の刀の切っ先がグスタフを指さすようにまっすぐ向けられた。

「第二楽章と行こうじゃねえかゲテモノ。喜べよ、オレが直々にテメエの葬送曲を演奏してやるからよう」

続

おまけ

コンバット・ベルグマン

出身 シーバルー大陸 マスケット村

前職 不明

身体的特徴 髪／蒼、後ろ髪を一束だけ異様に長く伸ばしている

服／黒いスーツ、ヨレヨレのYシャツ

安物のショートブーツ、くたびれたスラックス

アクセサリー／ステンレス製ダブルリング

キャラクターイメージ 長瀬楓（初期設定ver）、佐々木樹々

魔法、魔術事情

魔術

人は生まれながらにして魔力を持っている。

魔力とは「精神」であり、精神が異なるがゆえに魔術はいくつかの種類に分類され、成長合わせてさらに細かく分岐する。

魔術の属性

大きく分けて5つ。「火」「水」「風」「雷」「土」

魔術師たちはこれを5大元素と呼ぶ

魔術の分岐

「火」 「炸裂」 (エクスプロージョン) . . . 物体を爆発させる効果・高い破壊力
「焼却」 (バーニング) . . . 炎の操作、対象の焼き尽くす

「水」 「流体」 (ウォーター) . . . 水をはじめとした様々な「液体」を操作
「氷結」 (フリーズング) . . . 氷と冷気、固体を「造形」できる

「風」 「旋風」 (サイクロン) . . . 風を発生、気流を操作
「音響」 (サウンド) . . . 振動波を発生、肉体・精神のステータスに影響を与える

「雷」 「雷電」 (ライトニング) . . . 電気、雷を操作。物体に「雷速」を付加できる
「磁石」 (マグネット) . . . 磁場を操作、肉体の電気信号の阻害・操作が可能

「土」 「地盤」 (グラウンド) . . . 岩・砂・土を操作、土中の金属物質から武器造形が可能
「重圧」 (グラビトン) . . . 重力、力場の操作

魔闘術

肉体を貯水タンク、魔術を操作する力をバルブ、魔術を発生させる媒介を蛇口に例えることができる。魔術とは上記のように魔術を発生させるにはそのための「媒介」を必ず必要とするが例外がある。

体外に放出した属性を持つ「魔力」を、直接体表に纏い鎧のように魔術を「装備」する戦闘方法が確立されている。

属性ごとに異なる肉体への付加能力を用いた肉弾戦等術のことを、「魔闘術」と呼ぶ。

魔法使い・魔術師・魔導師

覚醒した「魔力」のみを操作できるのが魔法使い（主に物体を浮きあげるなど）

魔力を戦闘用に特化させた「魔術」を操作できるようになれば魔術師

5大元素すべての魔術を習得し、自在にコントロールできるようになれば魔導師

全ての魔術師は将来魔導師になるべく、日々精進を重ねる

魔力の重複によるリスク

魔術の盛んなラプチナにおける魔術の歴史上には、誕生した魔導師は指で数える程度しかない。

生まれ持った精神は一人ひとつがルール。その自然界のルールを破り魔力を研鑽することで元の魔力とは全く異なる魔力を手に入れられる。

しかしそれぞれ全く異なる属性を持つ魔術はその性質ゆえに反発しあい、体内でバランスを保てず崩壊し、暴走・爆発の恐れがある。

魔導師になる条件は5つの魔力をいかに体内でコントロールし、バランスを維持できるかが最大のネックとなる。

何もかもがデタラメだった。攻撃一つ一つを食らう側も、戦う姿を見されている側から見てもジンの戦い方は今までの物とは全く違う物になっていた。

その技を剣術と呼ぶにはあまりにも雑で、荒々しく、無鉄砲で、そして第一に卑怯だ。刀を一振りする度に虚を突かれ思いがけない場所へ攻撃を受け悶えること幾星霜、剣術とは名ばかりでグスタフの脇腹に深く食い込んだのはジンの踵だった。内臓が潰れてしまうような痛みに顔をゆがめた途端、右目を刀の切っ先が貫いてきた。

曰く「剣嘩殺法」。刀で斬る、突くはもちろんその中に混じって刀を投げる、殴る、蹴る、猫騙し、攻撃するフリ、嘘なども交えた勝つためならば一切の手段を択ばないこの世で最も卑怯で汚い剣術である。

素早く刀を引き抜くと、今度はもう一本の刀の峰で首を殴打するとグスタフは片膝を突く。間髪入れずに次は傷が回復する前に爪先がボールをけるように穴の開いた右目をめがけて突進、重い一撃はグスタフの体を少しだけ空中へ舞い上がったのだった。

グスタフとてやられっぱなしではない。痛みを堪えながら砂の上に着地すると、大口を開けて体内に残された氷の魔力を開放し石つぶてのような氷弾を吐き出す。だがこんな攻撃はもうジンは通用しない。

ジンは自らの羽織っているコートの端をつまむとマントのようにひるがえし、盾のように目の前を覆った。するとどうだろうか、岩山を破壊するほどの威力はある氷弾がジンのコートに触れた途端弾き返されてしまった。ゴムボールが石の壁にぶつかったように氷の粒はポンポンと弾かれあらぬ方向へ飛び散り姿を消した。ジンのコートには傷一つ付いておらず、もう一度返せばジンが余裕笑みを浮かべグスタフを挑発している。

名付けて「イージス・ヴェール」。ジンのコートは今両手に握っている刀と同じくジンの魔力によって作り出された超防御特化型魔法繊維服。魔術による攻撃を完全に無効化し、打撃等による衝撃以外全ての攻撃を完璧に防いでくれる最強の盾である。ちなみに背中に生えている黒い翼もこのコートの一部であり、コートの表面積を削って成形したもので同じ効果を持っている。この盾を使うことでジンはあらゆる魔術の効果を打ち消し、先ほどグスタフが吐き出した炎の攻撃もこれで防いだ。

ジンは刀を一本鞘に納めて一刀流の構えを取ると、翼を羽ばたかせながら魔術を使い空へ舞い上がった。付近の岩山よりも高いところ肩グスタフを見下ろしながら狙いを定めると、獲物へ向かい飛び込む猛禽類のように一直線に急降下した。上段から構えた刀を振り下ろし頭をカチ割ろうとしたが、グスタフが鋼鉄化した両腕でこの一撃を防ぐ……が、それも無意味に終わる。

ドシイイイイイイイイン！！

グスタフの足下を中心にした周囲一帯に、巨大なクレーターが生まれた。この刀はこれが厄介だと思いつつ、両腕の骨が小枝のように容易くへし折れるのを感じたも表情を濁す。

重い・・・この赤い柄の刀は異常なくらいの重量を持っている。今まで何度かこの刀による攻撃を受けてきたが一撃たりともまともに受け止められた記憶がない。正確な重さは見当もつかないが、今のこの一撃に限った話で言えば軽く見積もっても10t単位は間違いない。そんな刀をなぜジンは軽々と振り回せるのか不思議でたまらないがいつまでもそんなことを考えていられる余裕もない。グスタフは両腕を犠牲にしてもこの刀を処分してしまおうと企み両手の回転丸鋸を起動させた。高速回転する刃がこのクソ重たい刀の刀身に触れた途端勢い良く火花が散り、飛び散る火花のせいで目の前が見えなくなるくらい激しい摩擦が起こった。

ただの鉄ならこれで間違いなく刀身は折れてしまうだろうが、この刀はそうも言ってくれなかった。先に我慢の限界を超えてへし折れたのは丸鋸の方で、数秒間回転させただけで両手の丸鋸の刃が破片をまき散らして砕け散ってしまったのだった。肝心の刀にはあろうことか傷一つ付いておらず、完成したばかりのような新品同様の曇りのない輝きを放っている。

名付けて「破刀・碎」（バットウ・サイ）。刀身の重量と硬度に特化した、斬るのではなく物理的に「破壊」することを主観とした鈍器に近い刀。いかなる攻撃にも耐え、刀身は永久に折れず曲がらず決して錆びない。

手持ちの武器を失ったグスタフへ追い打ちをかけるように、ジンは餅つきに杵のように破刀を両手で振りかざし、勢いよく振り落した。すると耐久力の無くなったグスタフの両腕は千切れ落ち、顔面からヘソまでの間を真っ二つに切裂いた。同時に大きく空気を吸い込むと、猿叫のような耳に障る激しい雄叫びを上げる。これもジンが得意になった音の魔術で、振動と衝撃が同時に襲いかかるとグスタフはクレーターの外まで弾き飛ばされてしまった。

しばらく砂の上を転がりながら傷口を直しながらヤケクソで周囲の砂を体内に取り込んでいると、正面からジンが空中を滑空しながら追いかけてきたのが見えた。奇策と呼ぶべきか悪足掻きと呼ぶが相応しいかわからないが、グスタフは右掌から吸収した砂を高圧縮しながら発射した。高圧力で吹き出される砂粒は金属すら容易く貫通する破壊力を持つ。ピンホールのような穴から水と共に吹き出せばダイヤモンドでもカットできる、それが世に言うウォーターカッターの原理であるが生憎ここに水はない。ただし砂は無尽蔵に存在するので砂の量で水を補い、ピンホールではなく掌全体から吹き出せば十分な威力を持つウォーターカッターならぬサンドカッターの完成である。

目の前から迫ってくる砂の激流を前にジンは一瞬考える、あの攻撃を刀で受け止めるか？それとも無難に盾を使うか？

正解はどちらも否。刀では細すぎて防ぎきれないし、盾を使えばあの攻撃を防げるだろうが砂の衝撃までは防ぎきれない自信がない。无尽蔵に襲い掛かる砂の雨は散弾銃を上回る破壊力を持っている。盾とはいえ所詮は薄い布っきれ、そんなもので防ごうものなら直後に砂粒のタコ殴りリン

チが目に見える。

ではどうするか・・・こうしよう。

左手の刀を鞘に納め右手でもう一方の黒い柄の刀を抜く。両手の指で柄を掴むと、刀を回転鋸のように高速回転させた。異常なほどの速さで回転する刀身は残像を生み出し、刀の回転する軌道がくっきりと円になって見える。

砂の激流がその刀に触れた途端、まさに雲散霧消・・・砂粒はジンに触れるより早く刀に切り刻まれて消滅してしまった。動揺を隠せないグスタフはヤケになって噴射する砂の量を倍にするが、それでも効果は全く現れなかった。あの黒い刀の異常な切れ味が砂を切り裂き、刀とは思えない重さの刀身による回転だからこそできる人力シュレッダーの完成だった。

名付けて「閃刀・空牙」（セントウ・クウガ）。羽のような軽さと刀の本分である切れ味を徹底的に追及した万物を「切断」する刀。この刀にかかれば切れない物は何もないと、自然と確信できてしまい怖いものなど何もうなくなる。

ついにジンの刀の回転が止まるより早く、吸収した分の砂が切れてしまい砂の雨はピタリと止んでしまった。一瞬のスキを見逃さないジンは閃刀を右手に持つと、そのまま大きく振りかぶりボールを投げるように刀を正面に力いっぱい放り投げた。ついさっきまでグスタフの手に装備していた丸鋸のように高速回転しながら旋回する刀は文字通り空を切り裂きながら迫り、音も無くグスタフの首をちょん切った。それでもなお回転をやめない閃刀はそのまま空中をブーメランのように迂回してジンの手の中へ戻ってきた。

首がもげて足下に落ちる前に受け止め、あるべき場所にもう一度接続して難を逃れたグスタフだが・・・旗色はかなり悪くなっているのに変わりはない。ジンに傷つけられ、ダイヤモンドの力で回復するのに苦痛を感じ始めている。痛みが体内に残留し目まい、疲労、吐き気などの症状も露わになってきた。

これはダイヤモンドの力が弱くなっているのではない・・・体がダイヤモンドの力に追いつかなくなっている。ここまで来るのに15人の人間を体内に吸収し体を肥大化させ、戦いで傷ついた箇所は吸収した人間の肉体を削って治癒してきた。だがあの時の水蒸気爆発の影響が強すぎて体内に蓄積していた分をほとんど使いきってしまった。それどころかもう数えきれないほど殺されている、肉体の不死身さに酔いしれて余裕をかまし後先のことを全く考えていなかった・・・こんなことになることを全く計算に入れていなかった。

一瞬で治るような傷が今では数秒もかかってしまう、息が上がり呼吸が乱れスキが生まれてしまう。そのわずかなスキに付け込まれまた幾度も幾度も繰り返し殺される。

限界に近い・・・もう周囲に吸収して武装に使えるものは無い。万事休すとはこのことを言うのだろう。

A 3x5 grid of dots, consisting of three rows and five columns of small black squares.

否。

我は神である。このダイヤモンドの力を手にした時からそう信じていた、今も変わらず何の迷いも無く信じている。

この自分には夢が・・・成すべき野望がある。この力で世界を制し、全ての国を我が物とし、人間の頂点に立つこと。その野望をかなえる為に払った犠牲は100から先は覚えていない。使えるものはすべて使い、欲しいものは力づくで手に入れ、刃向う物は徹底的に蹂躪した。

だれも逆らうことの無い自分だけの帝国をこの世に築きたい・・・そのためには、こんなところで片膝をついている暇など・・・あんな糞餓鬼に足止めされている時間などどこにもないのだ！

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

衰退してきた自らの肉体に喝を入れるように、グスタフは雄叫びを上げた。先程のジンの猿叫には遠く及ばないが、その雄叫びにはそれなりの気合いが籠っているのをジンは感じ取れた。

「・・・何なんだ貴様は？なんで邪魔をする？」

「・・・・？」

「この私には野望がある。その野望の為ならどんなことでもしてきた。なのに貴様は何なんだ！！なんでこうまで私の邪魔をするんだ！！人の夢の邪魔をして何が楽しいんだ！！」

一瞬、呆れてものが言えなくなってしまった。力でどうすることもできなくなったと思ったら、今度はガキの我儘みたいなことを言い始めた。馬鹿馬鹿しくてため息も出ない。

夢だとか野望だとか全く興味がない。物凄く下らない。面白くもない。ジンはこの野郎が気に入らないからコイツを殺しに来たのだが、そう言い放つのもなんだかつまらない気がする。

・・・・・・良いことを思い付いた。あの男の全てを徹底的に否定するいいセリフを思い付いてしまい、ジンは思わずニヤリと口元をゆがめてしまった。

「楽しいねえ。そういう夢に向かって我武者羅になって突っ走る野郎を見ると無性に邪魔したくなる。邪魔して邪魔して邪魔して、それで最後に躓いてコケて、夢を達成できなくて咽び泣く野郎の顔を見るのは楽しくて仕方がない、痛快って奴だ！」

「なんだと！？」

「オレはテメエの夢だの野望だのそんなものに興味はねえ。だけどその夢に向かって現在進行形で走ってるってんなら話は別だ。オレは徹底的にテメエとテメエの野望を否定してやる・・・思いつく限りの邪魔をし尽くして、テメエが転んで地面叩きながら号泣する様を見ながら大笑いするのが今から楽しみで仕方ねえよ！！ダッハッハッハッハッハッハ！！」

人間として、最低のセリフ回しであった。しかしそれが本心でも嘘でも、グスタフを挑発するには十分すぎた。

グスタフは今の言葉で完全に頭の中が爆発し、腸が煮えくり返り、堪忍袋の緒が切れた。あそこまで徹底的にすべてを否定されたらきっと誰だってこのくらい怒ってしまうに決まっている。周りには武装に使えるものが無い？・・・否！グスタフは周囲にある砂と岩をあるだけ全て吸収し尽くすと、怒りに我を忘れてそれを両腕から噴射した。先ほどのサンドカッターの数十倍の威力はある砂嵐を、ジンは飛んで回避した。それでもなお蛇のようにうねりながら砂の濁流はジンを追撃し、砂の嵐は砂の雨となって降り注がれた。

閃刀を使って同じように砂を切り裂いてやろうかと思ったがこれはさすがに難しそうだ判断し、ジンは大きな翼を舵に使い空中を縦横無尽に飛び回り続けた。噴射する砂が切れた時が攻め時なのだが生憎今度は砂切れを起こしてくれそうにない。

同じ過ちを繰り返さないよう学習したグスタフは、下半身から常時砂を吸収し、両腕で砂を噴射している。ガトリング砲のように給弾・装填・発射を常に繰り返すことで一切のスキも無く攻撃を続けられるというわけだ。

ダメ元で勢いよく迫ってくる砂に音の魔術をぶつけてみたが、効果が見られたのは一瞬だけ。音の衝撃波で目の前の砂を飛散させることはできたがその後ろから続いて襲い掛かる砂を防ぐことはできなかった・・・息が続かないのだ。

余裕を見せていたつもりだったがここにきてまたしても旗色が悪くなる。空を飛んで逃げている分には問題ないがこちらの魔力にはダイヤモンドと違って限界がある。正直今も少し疲れてきたぐらいだ。長期戦にもつれ込めば有限の魔力を消費し続けているジンは不利になる。あの砂の濁流をとにかく何とかしなければ話が先に進みそうにない・・・どうしたものか？

いっそのことヤケクソで破刀を放り投げて何とかわずかなスキを作ってやろうかと考えていると、眼下で砂をぶちまけているグスタフへまっすぐ向かっていく影が見えた。

それは虎眼だった。脇腹から血をボタボタ落としながら走り、グスタフの死角に忍び込むと虎眼は自らの腰に巻いていた長い腰布をほどき、鞭のようにふるって先端をグスタフの右腕に絡ませた。普段から拳闘主義の虎眼だが、扱いが下手なだけで決して武器が使えないというわけではない。

とりわけてこの腰布・・・いざという時の為に緊急用としてとっさに扱うことのできる立派な防

具であり武器でもあるのだ。布鞭術、布槍術、そして布ヌンチャクのレクチャーは一応済ませており何とか形になる程度には使うことができる。腕に絡まった布を渾身の力で引っ張ると、砂の濁流の軌道が変わりジンを追跡することをやめてしまった。さらに虎眼は腰布を両腕に巻きつけてそのまま引き続けると、グスタフの体が宙に浮かび虎眼を中心に半月を描くように頭上を旋回し、頭から砂の上に着地した。

肝心の虎眼は今の一撃だけで相当体力を称した様子で、思わず片膝を突きゼエゼエと肩で息をしている。

「ハァァ・・・ハァ・・・負けっぱなしで終わるのは俺の主義ではない。たとえ勝てなくとも、せめて一矢報いるくらいは問題ないだろう？」

今日一日だけで虎眼は敵に負け、味方にも負けている。当然負けることは初めてではないが負けることで感じる屈辱は永遠に慣れることはない。こいつらに今の自分では勝てないことを嫌と言うほど痛感させられて・・・だけこの世にはイタチの最後っ屁という言葉がある。苦し紛れでもヤケツパチでも無駄な足掻きでもなんでもいい、とにかくこの自分の中にある気持ちの悪い感情を払しょくさせたかったためにこの行動に打って出た。結果的にジンを助ける形になったがそれもまた結果オーライ、だってアイツの背中がスキだらけだったんだもん。

だが今ので少し傷が開いたようで、虎眼は脇腹の傷口を押さえ苦悶に満ちた表情を浮かべ俯いてしまった。

「又ガアアアアアアアア！！！！」

そんな虎眼の背後から異常な発狂が木霊し、鼓膜を激しく振動させた。反射的に振り返ると虎眼の後ろにはグスタフがいた。さっきまで離れた場所で倒れていたはずなのに・・・。あろうことかグスタフは砂の中をもぐり、モグラのように砂中をかき分けながら虎眼の背後まで潜ってきたのだった。道中発見した岩石を吸収し、拳を岩でコーティングして虎眼の顔面めがけて振り下ろした。

虎眼はとっさに両腕を交差させて攻撃をガードするが、あまりの怒りで疲れすら忘れ去っている一撃は虎眼の左腕を簡単に粉碎して殴り抜けたのだった。

腕に巻き付いた布を引き千切り、ジンのことを一瞬で忘れて目の前の虎眼を殺すことしか考えなくなったグスタフはまっすぐに砂の上を転がる虎眼を追いかけた。人間を捨てたような獰猛さが垣間見える瞳が虎眼を捉えると、岩石の拳を振りかざし顔面に狙いを定め振り下ろした。片腕が使えなくなり傷口も開き満身創痍状態の虎眼にこれを防ぐ術はもうない・・・一瞬死の恐怖を感じた虎眼は格闘家としては最悪な行為、目を瞑ってしまい自らの絶命を覚悟し歯を食いしばった。できることはやりきった・・・悔いはない。

ガキィィィィン！！

・・・肉体が破裂するには不自然な金属音が脳みその芯まで響き、耳の奥で嫌な耳鳴りがした。ゆっくり両眼を開けて確認すると、真っ先に視界の中に入ってきたのは真っ黒な大きい翼・・・見慣れてはいないがこれの持ち主には心当たりがある。その持ち主は破刀を両手と右足で両端を強く抑え、正面から落ちてきた強烈な拳を受け止め小刻みに体を震わせていた。額から汗が流れ落ち表情もかなり辛そうにして奥歯を火花でも散りそうなくらいの力で食いしばっている。

「グゥ・・・小僧おおおおお！！」

「へへへ・・・喧嘩の最中に余所見たぁ随分余裕ブッコいてくれんじゃねえかこのタコが
ああ！！」

再び音の衝撃波がグスタフの全身に降り注ぎ、空中をプロペラのように回転しながら彼方へ飛んで行ってしまった。

ここにきてようやく、ジンは片膝をついてしまった。初めて手に入れた魔力をここまで激しく浪費してしまった代償が来たようで、全身の力が抜けるような感覚に陥り息が大分荒くなってきた。

流石にキツイ・・・そろそろケリをつけないければこちらがどんどん不利になる。最後の力を振り絞りゆっくり立ち上がろうとすると、コートの背中を虎眼が引っ張り一瞬つんのめってしまった。振り向けば虎眼がギラギラした眼光を向けてまっすぐにジンの目を見て、何かを訴えていた。傷口が開き痛みと失血で声もまともに出せなくなるまで戦った虎眼の言わんとすることは・・・なんとなく分かる気がする。何かを察したジンは虎眼の手を埃を払うように払いのけると、メガネの位置を直しながら言った。

「わあってるっての・・・借りは１０００京倍にして返してくる」

ジンは破刀と共に閃刀を抜き取り両手で強く握り直すと、砂を蹴って燕のように地面ギリギリを水平に飛行し、グスタフの元へ急いだ。

すでに準備の整っているグスタフは目の前から迫りくるジンに対してもう一度砂の濁流を真正面から御見舞する。ここでまた逃げては元の木阿弥・・・１、２分前と何にも変わらなくなる。なので今度はジンが行動をとる。

ジンがとった行動とは・・・地面スレスレからの急速下降、ジンは砂の濁流にのまれてしまう前に砂の河の中へ潜ったのだった。グスタフが虎眼を奇襲したときと全く同じ方法で砂中を魚のように泳ぎ、縦横無尽に駆け巡る。

グスタフは先ほど砂に潜る際、目測と自分の勘で虎眼の位置を記憶し砂の中から奇数に成功した。しかしジンは違う。砂の中を高速で移動しつつも、音の魔術を最大限に利用し自分の位置を相手の位置を寸分の狂いなく把握しながら泳いでいる。

アクティブ・ソナーと言う機械が存在する。水中で音を発生させ、やまびこの原理で返ってくる音波の時間を計測して対象との正確な位置を把握することができる便利な発明品である。これは潜水艦や漁船などで使われている搜索・索敵機なのだが田舎生まれのジンはこんな物の存在などハナッから知らない。音を使うという観点からこのような方法を瞬時に思いつき、自然と活用できている。

グスタフには聞こえないようなわずかな音波を生成・発生させながら砂中を泳ぎ対象の位置を確認、且つ自分の位置を決して知られないようにできるだけ高速で移動を続ける。

砂の上では突然目の前から消えたジンに動揺を隠せず、周囲を忙しく見回しているのが手を取るようにわかる。「音あるところに敵なし」・・・ジンは自分の中で訳の分からない格言を発明するところまでようやく刀を構えた。

槍投げの要領で２本の刀を一直線に放り投げると、刀は正確にグスタフの背後から体の中心を貫いた。

虚を突かれたグスタフが背中に誰かいるのかと思い、力強く裏拳を振るうがそこには誰もいない。何がなんなのか訳が分からなくなり、混乱状態のまま奇声をあげて無茶苦茶に拳をぶん回すが全て空振るばかり。いったん落ち着いて背中に刺さった刀を抜こうとした瞬間、これが最後のチャンスだと確信しジンが砂の中から水面の獲物に食らいつこうとするサメのように飛びだした。狙うは心臓・・・ダイヤモンド。

「これで終いだ！！」

砂の中から現れた巨大な翼が激しく光を反射させると、グスタフの脇腹に食い込んだ。

否、食い込むだけではない。翼の先端が触れた部分から皮膚が裂け、肉が千切れ、血液が迸り、骨を両断する。

ジンは、背中の翼でグスタフの上半身を真っ二つに切裂いたのだった。

名付けて「偽刀・影幽」（ギトウ・エイユウ）。ジンが作り出した刀は２本だけだと言った覚えはない。翼がなぜ金属光沢を放っているのかって？だって本当に金属繊維でできた翼のような姿

をしたれっきとした「刀」なんだもん。もしものの時の緊急用、両手に刀を持っていない時の騙し討ちに適した平凡な切れ味の、言ってみれば仕込み杖みたいなものだ。

切断された上半身が砂の上に落ち、バランスを失った下半身が仰向けに治れるのと同時に、ジンも砂の上に着地した。

疲れた・・・真っ先に口から毀れた最初のボヤキがまさにそれだった。肩から力が抜け、胸をなでおろすように体内にたまっていた緊張感を息とともに吐き出すのだった。何はともあれ、これでようやく

「ま・・・まだ・・・だ・・・」

「・・・・・・・・はあ」

もう見たくもない。しかしアイツの最後の姿だ、壮大に笑い飛ばしてやろうと思いつつも面倒くさそうに振り替えると、案の定グスタフが両断された上半身を小脇に抱えて仁王立ちしていた。体から切り離された頭部が、薄っぺらいホラー小説に出てくるバケモノのようにゲラゲラ笑っていた。

「フハハハハハハハ！！まだ力が感じる、まだ私は死ぬことなどない、ダイヤモンドがある限り私は死なない！！」

「へーすごいね・・・まじすごいね・・・」

ジンのテンションは対照的にダダ下がり状態だった。もう自分自身がグダグダになりセリフも棒読みになっている。

「今のは不覚を取ったが次はもう聞かないぞ！！貴様のエモノは私が持っている、その背中の刃物一本でどこまで太刀打ちできるかな！？」

「・・・・・・・・最強にうぜー」

「今度こそ・・・今度こそ息の根を止めてッ！！」

「ああ・・・まだ気付かない系？」

もうこれ以上事態をグダグダに引き延ばすのも面倒くさくなってジンは右手に持っているものをグスタフに見せた。

その直後・・・グスタフは顔面が青ざめ、驚愕した。ジンが持っていたのは紛れもなく体内に仕舞っていたはずのダイヤモンドと融合した自分の心臓だった。あのダイヤモンドと心臓がいつまでも融合していればグスタフが死ぬことはないが、もしも引き剥がされてしまったらその直後グスタフはただの人間に戻ってしまう。心臓が対外にある分もし引き剥がされたらその瞬間間違いなく死ぬ。だからグスタフは自らの体裁を忘れ去り、急いで上半身を結合させると闘牛のようにジンへ突進するように走り出した。

「貴様いつそれを・・・それを返せえええええ！！」

「・・・・・・・・ま〜めが欲しいかそ〜らや〜るぞ〜っと・・・・・・・・ほらよ」

なんとなく子供の頃におぼえた童謡を口ずさむと、ジンはグスタフの頭めがけ、自分の父親と喧嘩するのと同じ感覚でダイヤモンドを投球した。まっすぐ飛んだダイヤモンドは見事グスタフの額にクリーンヒット、ガツンッ！と地味なくらいに痛そうな音をグスタフの体内で響かせるとダイヤモンドはそのままフワッと空中に舞い上がった。

痛みを堪え、みじめにも涙を浮かべながらダイヤモンドを手にしようとグスタフが急いで手を伸ばすのだが・ ・ ・ ・ ・

それがグスタフの敗因となった。

ダイヤモンドに全ての意識が集中した瞬間、ジンが駆け出しグスタフの背中に刺さりっぱなしの剣を引き抜くと最後の大技に食って出た。

序曲、交響曲、奏鳴曲、追複曲、輪舞曲、遁走曲、これらの技をミックスしたジンの混成奥義「組曲」が発動。風の属性を持つ魔術との相乗効果が相まって、初めて演奏した組曲をはるかに上回るテンポで曲は進み、楽譜は一気に最終楽章へと向かう。

竜巻の中で瞬間ボロ雑巾にされてしまったグスタフが無風空間、台風の目の中からまっすぐ地面に頭から落ちてきた。その落下地点にはジンが待ち構え、両腕を交差させ姿勢を低く構えている。

空中で互いの目線が重なった刹那、ジンは剣を抜いた。

シュキンッ！シャキンッ！

それはまるでガラスの風鈴のような、耳に大変心地よい涼しげな抜刀音だった。

鎮魂歌・・・本来なら一撃分で85回切り殺せるジンの必殺技と呼べる立派な技なのだが、魔術と併用すれば必殺技では済まなくなるような殺人剣へ姿を変える。

自分自身でも何回斬ったか正確な数を数えることができなかった。それほどにまで早く、それほどにまで手ごたえを感じない神速の居合連斬。わずかに確認が取れた回数だけでも・・・24

5回。

グスタフがジンの目の前を通過して落下するほんの数秒の間にこれだけ斬った感触はある。しかし本来はひょっとするともっと斬っているのかもしれない。

そして当のグスタフはと言えば、2本の刀で最低245回切り裂かれたせいで頭が地面に触れた途端・・・コンクリートに叩きつけたスイカのように全身が細かく飛散し、体内で爆発したかのようにミンチになった肉片と血しぶきをまき散らした。その姿に、人間としての名残は一切確認できない・・・見事な紅葉おろしの完成である。

直後、左手の破刀を垂直に持ち上げると、計算し尽くされたタイミングで切っ先にダイヤモンドが落ちてきた。当然刺さってなどいない。

ダイヤモンドの表面にコビリ付いていた心臓もズルリと剥げ落ちると、砂の上でジュウジュウ音を立てながら蒸発し、やがて消えてしまった。

長きにわたったダイヤモンドを巡る壮大な血生臭い大喧嘩・・・ここにジンの勝利を持って完結す。

続

おまけ

ジンの新しい装備、スペック

魔術属性：「風」の系譜「音響」（サウンド）

魔術兵装：邪道三刀流

戦闘方式：剣嘩殺法

装備品 閃刀・空牙

プラスチックバットを振り回すような軽さと触れた紙片が自重で切断してしまうほどの切れ味を持つ。外見は黒塗り鞘の日本刀

破刀・砕

数10tクラスの超重量と絶対に折れず曲がらず傷つかない最強の硬度を誇る物理粉碎に適した鈍器のような刀。外見は赤黒い漆塗りの日本刀

イージス・ヴェール：

魔術攻撃の一切を無効化する特殊魔法繊維製のロング陣羽織。物理攻撃の衝撃以外、あらゆる被害から身を守り決して破れず穴も開かない

偽刀・影幽：

騙し討ち用の翼型仕込杖。イージス・ヴェールの繊維を使って形成された黒翼。飛行する際に舵取りの補助的役割を担う。

伝説の彼女事情

「じゃあここにサイン願います」

「はい・・・こんな感じでいいですか？」

「はい。毎度さまー！」

今日も今日とて元気は宅配便のに一ちゃんは、荷物を手渡すと忙しなさそうに玄関を占めて出て行ってしまった。この荷物はオレこと李倍朝霞当てのもので、送り主は知り合いのリンドブルムさんからだった。ちなみにこの人は今ドイツで酪農と畜産を営んでいる。今回のように、時々自分の牧場で作った物をこうやっておすそ分けしてくれるととてもいい人なのだ。

今回送ってくれたものは何か楽しみにしながら包装紙を剥がして中身の箱を開けると、出てきたのはヤギ肉のハムとソーセージの詰め合わせ。さらにメモ紙が一枚同封されており、一筆「引っ越しおめでとう」と記されている。ここに引っ越してもう数か月経過している、いくら引っ越し祝いと言ってもこれは遅すぎるだろうと苦笑いを浮かべてしまった。

「おお、うまそうだな！」

「本当に、今年は美味しそうなものが来たなあ」

「でもこんなにたくさん食べきれねえぞ？」

彼、蔵馬健が言うとおりの、お中元サイズのボンレスハムが5本にソーセージがゴロリと500g、大判振る舞いにもほどがあるバカげた物量だった。とてもではないがすぐに食べきるのには難しい量で、家の料理を担当しているあーさんはこの量を前にどうしてやったらいいものかと頭を抱える。

「明らかにパーティーサイズだよなあ、これ？」

「いっそのこと10人くらい集めてここでオクトーバー・フェストでも開催するか？」

「無断でこんな狭い家に人数呼んだら俺達大家さんに味醂干しにされて食われっちゃうぞ？」

「うう・・・そいつはガチで勘弁だな。じゃあこれどうする？」

「例に習って、おすそ分けしかないな。大家さんはもちろんこのアパートの皆に少しずつ」

「面白くないがそれっきゃねえか」

「だな、そんじゃあ早速手始めにお隣の少年へっと」

大家さん以上に世話になりっぱなしになっている人間の隣人、沖野海人へさっそくハムを一本渡すために壁の穴へ直行した。

カレンダーを一枚めくればそこはもう隣人の部屋だ。部屋の住人からも自由な入室許可も貰っているので何の気兼ねなく二人は隣の部屋へ上がり込むのだった。

しかし二人が隣人の部屋に片足を突っ込んだ瞬間、空気が止まった。二人は部屋の中に居た二人の人物を視線が重なり合い蛇に睨まれた蛙のようにフリーズしてしまったのだった。

部屋の中に居た二人の人物・・・この部屋の主で今カップ焼きそばのお湯を麺ごと流しにぶちまけてしまった直後のような顔になっている沖野海人さんと、誰かも知らない女性。

そう、女性。

この人、あろうことか女を自分の家に招き入れていた。それを知らなかった隣人二人はこれからどうしたらいいものかわからなくなり、思考が停止し電池が切れたおもちゃのように動かなくなったのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

「あれ・・・・お邪魔だったかしら？」

「・・・海人、この者達は確か」

「ああああああああああああああああああ！！！！！！」

突如奇声を発した海人が、アメフトばりのボディタックルをあーさんの腹にお見舞いし、後ろに立っていたケンさんを道連れに部屋の奥まで押し返した。運悪くテーブルの角に頭をぶつけたケンさんはその場で声も出さずに悶え、呼吸不全になるほどのタックルを食らったあーさんは軽く白目を剥いている。

「痛ってえ！！何すんだよ少年！？」

「違うからな！！あれはそんなんじゃなくれ俺の友達だから！！マジで違うからな！！！」

「いや、自分ら何も言ってないんだけど？」

少年らしくない鬼気迫る勢いで、全身から謎の汗を滝のように滴らせ二人の胸ぐらをつかみ激しく揺すった。

息も荒くなり、必死になって何かを隠そうとしているのは見え見えだったが、少年は質問させる暇も与えずに二人を揺さぶり続けた。

「あの、友達みたいなもんだから！！二人のことは話してるけど正体の事は何も話してないから！！バレたりしたら俺の方はヤバいから！！だから今日はもう部屋に入らないで、お願い！！」

「分かった、分かったから少年落ち着け！！息ができない」

「もう揺さぶらないで、ウップ・・・酔った・・・気持ち悪い・・・吐きそう」

「マジで違うから！！彼女とかそういうんじゃないから！！」

「なんじゃ、ワシは主の女ではないのかえ？悲しいのう」

前触れもなく頭上から降りてきた声に少年は心臓が跳ね上がり、二人の胸ぐらから手がスルリと抜け落ちてしまった。畳の上に頭を打ちつけられた二人は激痛に顔をゆがめ床の上をゴロゴロ転がった。

少年はと言えば背後に迫りくる鬼でも身うようにゆっくり振り返ると、あの穴からひょっこり顔を出しているあの女性と目があってしまった。

「先にワシと付き合ってほしいとせがんだのは主であろうに、何なら今日限りで本当に『ただの友達』になっても構わんのじゃぞ？」

「ちょちょちょちょっと待って！！違う、そういうことじゃなく、この人らいろいろ問題があってそれがバレたくなくて！」

「問題のう・・・別にワシは構わんのだが、ここまで必死にされるとワシでも傷つくぞ？」

「いや・・・その・・・ごめん」

彼女が穴をくぐって二人の部屋の中に入ってきた。

身長は高い、１７０くらいはある。黒いロングのストレートの髪にタレ気味の大きな黒い瞳。全体的に細長い体つきで、それでいて出るところは出て締まるところは締まった、モデルにもなれそうなくらいの美貌だった。誰がどう見ても美人と呼んで問題ない高水準な女性だが、その口調はどうも年寄りを感じさせるのが玉に瑕だった。

「～っ！！痛ててて、なに？その人もしかして少年の彼女さん？」

「なんじゃ生きておったか、イカにもタコのワシは正真正銘、この男のスケじゃ。主ら二人の話もよう聞いておるわ」

「それは何よりで・・・というか少年、別に自分らにそんなこと隠さんでもいいじゃないか？」

「いや・・・だっていろいろと問題が」

「なんじゃ海人、自分やワシの事よりこ奴らの方が心配か？なら安心せい、この男どもの秘密ならよう知っておるわ、それこそ『随分昔から』・・・の」

・・・その場にいた3人の男どもが全員目を点にした。少年が危惧しているのはこの二人の正体、つまりバケモノが自分の住まいの隣に住んでいることがバレた際何かしらの迷惑がかかってしまうのではないかとと思っているのだ。悲鳴を上げて気絶でもしたらどうしようとか、今日だって一苦労してようやく家に招き入れることに成功したのに怖がって二度と家に招くことができなくなったらどうしようとか、初心者リア充の心配は尽きることがなかった。

なのに今・・・彼女は何と言った？点になった眼でもう一度彼女を見上げると、面白いおもちゃで遊んでいる子供のような無邪気な笑顔で見下ろしている彼女がそこにいた。

「秘密って・・・あの？」

「心配なんぞ無用じゃと言うに・・・久しぶりじゃのうリヴァイアサン、それとクラーケン。かれこれ200～300年位ぶりか？何も変わらん様で何よりじゃ」

「「「EEEEEEEEEEEEEEEE！！！！！！！！！！」」」

少年だけではない、あーさんとケンさんまで一緒になって奇声を上げた。全ての事情を呑み込んでいる彼女は何事も無く、ただ無邪気にその様子を見て笑っていた。

「に、200～300年前って・・・どこかでお会いしましたっけ俺ら？」

「自分は・・・記憶がよくない方なんですけど？」

「ていうか・・・え・・・まさか・・・え！！！！」

「かんらからから。記憶力の乏しい連中じゃ、こうすれば分かるかえ？」

そういうと、彼女は両眼を閉じてゆっくりと深呼吸を始める。気持ちを落ち着かせながらゆっくりと自分の中にある力を目覚めさせてゆくと、その力が徐々に体表へ顕現した。

頭髮の隙間からびよこんと飛び出した一对の四角い耳、鋭く伸びる両手の爪と小さい牙、スカートの中から出てきたのは三本の先端の丸いフワフワした毛並みの長い尻尾。

その姿はまさに、時の一大ブームを巻き起こした猫耳の猫娘ルックスそのものだった。

それを見せられた3人の男どもは開いた口が元に戻らなくなるまで開けっ広げ、少年はそれに加えて目玉を飛び出してもう二人の人外生物は同時に何かを思い出し彼女を行儀悪く指差した。

「かんらからから・・・これで思い出したかえ？」

「ああああああああああああ！！！！思い出したああああああああああ！！！！」

「あんた確かあん時会った猫又の！！そうだ、青鬼の追悼式典の時以来か！？」※

「ようやく思い出したか阿呆共め。もう少し頭を鍛えたらどうじゃ？」

「え・・・ちょ、待・・・猫又！！？？」

100メガショックの衝撃事実、少年の頭はパンクした。生涯生まれて初めて真剣な恋をして、友達から始めて付き合いだしたのは去年の夏。知人に誘われた合コンも断って彼女との時間をできるだけ多く作り、のちに告白してOKをもらい本物の彼女となってくれたのが今年の春。何度断られながらも諦めずに自分の住まいに誘うこと苦節5か月、ようやくより親密な関係を築けると思い意気高揚していた矢先に知らされる彼女の真の正体。なんと彼女は日本の妖怪猫又だった。

笑っちゃうね。アハハハハ・・・

「笑えるかああああああああ！！！！」

「ウオッ！！どうした少年！？」

「ウソ！？猫又ってことは！？え、猫娘！？え！！？」

「すまんのう海人、あまり長い間隠すつもりはなかったんじゃがどうもタイミングが掴めんので。改めて自己紹介しようではないか、ワシの名は牡鹿 千里（オシカ センリ）と申す。生まれは今より1200年以上前の平城京は奈良時代。野良猫だったワシは100年の時を経て肉体が妖力を纏い猫又として現世に転生したれっきとした妖怪じゃ。それから今日に至るまで幾度となく名を変え住処を変え、時代に合わせた生活を「えんじょい」しておる。ちなみにこの名前は時代に合わせて自分でつけた名前での、本名は猫多羅天女と言うのじゃ」

千里と名乗る猫または少年へ悪戯に成功したような子供のような無邪気な笑みを見せると、尻尾を左右に振った。

しかし当の本人はもう頭がの中の思考回路がショートして脳天から白い煙を上げている・・・要するに壊れてしまった。考えることも頭を悩ませることもやめて、ただ茫然と虚空を見つめていつ再起動するかもわからない脳みそをゆっくりを冷却することだけに専念していた。

その様子を見せられているあーさんとケンさんはさすがに少年がかわいそうな気持ちになるのだが、何と声をかけていいのやらわからず宙に浮いた手をブラブラさせている。

それに見かねた千里が役に立たない男二人を差し置いて行動に出た。電源の落ちた少年の背後に回ると、両腕を少年の肩に回し抱き着くような形で体を密着させてきたのだ。

背中に押し付けられる心地よい違和感のおかげで脳みそが再起動し、現状を把握した瞬間少年の顔色は真っ白から真っ赤に変わった。

「あ、ああああああのあの・・・な・・・なに！？」

「そう難しく考えるでない、ワシの扱いはその阿呆二人と同じで構わん。しかしワシは二人よりもっと仲の良い関係を持ちたいと考えておるのは事実じゃ。何せ、ワシは主の物になったのじゃからのう・・・違うかえ？」

「えっと・・・その・・・その・・・背中が・・・」

「それとも何か？人間でない女になんぞ魅力を感じぬのか？」

「いやそんなことは全然！！・・・マジで魅力的です・・・」

「かんらかんら・・・よろしい」

うぶな少年の反応一つ一つを堪能するかのように艶めかしい悪戯を続ける千里は、最後のトドメと言わんばかりに少年の首元をペロッと舐め上げた。生暖かいザラザラした舌先が自分の首をなぞるように舐められると、少年はビクンッ！と体を跳ね上げ激しい興奮状態へ突入してしまった。こうなってしまったら最後、さっきとは逆の意味で何も考えられなくなってしまうのであった。

そんな馬鹿みたいに周囲の視線を気にせずイチャイチャしているバカカップルを眺めている阿呆二人は、千里の様子を見て首をかしげていた。

「・・・この猫娘こんなに積極的な性格だったっか？」

「いやそんな筈ないだろ？だってあの時摺り寄ってきた烏天狗を焼き鳥に転生させたのって彼女だろ？デレデレどころか相当なSっ気で人を苛めるのが好きでこと恋愛感情に至っては無頓着にも等しかったはず」

「黙って聞いとれば好き勝手言いおって、ワシとて人を愛するくらいの感情は持ち合わせておるわ。じゃがその感情も200年に一度きりじゃがな」

「200年？え、それってどういう意味？」

「知りたいか海人？ワシら猫又はどうもその阿呆二匹と違って繁殖が可能でう、女の日と呼んでいる「ナニ」が200年周期で一年間訪れるのじゃ。そして今年がその200年目・・・もう分かるであろう？」

説明を終えた瞬間、千里は少年の体に回していた腕の力を強めて抱きしめてきた。少年が首を回して背中に居る彼女の顔を見てみると、千里はいつの間にか顔をほんのりピンク色に染め潤んだ瞳でこちらを見つめつつ、軽く息を荒立てている。

彼女の話をもとめると・・・要するに今年は200年に一度の発情期ってやつだ。

「・・・発・・・情？」

「かんらかんら・・・今まで誘ってくれたのに今日まで断ってしまっすまんのう。女にはそれ相応の準備がある故支度に時間を取ってしまった」

「え・・・準備って・・・？」

「かんらからから・・・部屋に戻ったら教えてやろう。そのために今まで誘ってくれたのじゃろう？」

千里の表情がとてつもなくエロかった。正直、溜まりません。本当は家に招いて一緒に遊ぶくらいのつもりで誘ったんだが、本人はたまたまそういう周期だったため今まで「準備」するために今まで誘いに乗ってくれなかった。

・・・そう考えてしまうと少年の頭は冗談抜きで爆発した。顔全体から蒸気が湧き上がり、一瞬で熱中症にかかって畳の上に顔面から卒倒して動かなくなった。

そんなうぶな少年の反応から、周囲に自ら童○であることをさらしてしまうことに気が付いたのは翌日の早朝。結局その日は意識が回復せず自分の布団の中で就寝。千里は「また大学で会おう」と伝言をあーさん達に託し帰宅。回復後ケンさんから手渡された茶筒のような大きさのハムと大量のソーセージをもらい朝食を済ませると・・・その日大学に行くべきか否か本気で頭を悩ませた。今の状態で千里の顔を見たら自分はどうなってしまうのか想像もつかず、何かの間違いでも起こしたらどうしようとか考えると学校どころでは無い・・・と騒ぐだけ騒いでから、諦めて大学へ行くのだった。

「少年も、青春してるんだね～」

「いい事じゃないの」

「・・・自分も彼女とか欲しいなあ」

「太平洋に行って大王イカと深海デートでもしてくれば？」

「ブッコロ・・・」

終わり

※青鬼の追悼式典→泣いた赤鬼参照